

津波 伝え方 考える

宮城や岩手の津波被災地の語り部が、活動の意義や教訓の伝え方を考えるフォーラムが29日、南三陸町であった。伝承に取り組み3人は約300人を前に記憶の風化への懸念を訴えた。

南三陸でフォーラム



教訓を語り継ぐ必要性を訴える語り部ら。右から北村弘子さん、山内宏泰さん、佐藤敏郎さん。南三陸町志津川の南三陸ホテル観洋

語り部3人、風化への懸念訴え

石巻市の佐藤敏郎さんは、市立大川小学校で次女を失った。「目を背けたくなるが、(真実を)あいまいなままにせず、あの日までのごとも含めて伝えることで失われた命は無駄にならず、輝き続ける」などと語った。

収集した被災物などを常設展示する気仙沼市のリアス・アーク美術館の山内宏泰・学芸係長は、時の流れによる風化を指摘。「語れる人がいるうちに語りを集め、伝える方法を考えないといけない」と訴えた。時代に合わせて表現方法などを変えることも提案した。

釜石市の「釜石 あの日あの時甚句 つたえ隊」の北村弘子さんは、被災者の思いを伝えようと作詞した甚句9編のうち、2編を壇上で相手の藤原マチ子さんと披露。拍手を浴びた。

最後に参加者で「語り部の活動を理解し合い、ゆるやかなネットワークを広げ

ていく」とする宣言を採択した。2月26、27日には、兵庫県淡路市などで「第2回全国被災地語り部シンポジウム」が開かれる。

327 人生還の「高野会館」見学

フォーラムに先立ち、津波の傷痕をとどめる数少ない



被災時の姿をとどめる高野会館3階の大広間

建物の一つで、冠婚葬祭場だった同町内の「高野会館」の内部が参加者に公開された。

鉄骨一部4階建ての同会館には、約200坪先の志津川湾から押し寄せた津波が高さ約17分にせり上がり、3階の天井まで達した。6年近くたった今、1、2階は天井やさび付いた配管がむき出しに。3階大広間も天井が一部壊れ、じゅうたんの上に照明のライトやガラス片が散らばるなど、当時の生々しさを残していた。

震災時、大広間はお年寄りの演芸大会の終了直前。会館スタッフが建物の外に出ようとすると人を制止して屋上に避難させ、327人が難を逃れたという。



志津川湾(中央奥)からの津波は、高野会館の屋上のすぐ下にまで迫った。いずれも南三陸町志津川

会館を所有する阿部長商店(気仙沼市)の阿部隆二郎副社長は「企業努力で建物を維持しているが、教訓を後世に伝えるために、行政に支援いただけるとありがたい」と話した。

(茂木克信)